

『最終獄中通信』

2018年08月27日

大道寺将司は、1969年に法政大学に入学し、全共闘運動に参加した。当時の多感な学生たちの多くは、日米安保体制に「否」、ベトナム戦争への反戦、管理社会体制への批判、大学経営の不正糾弾など、激しい問題提起を突き付けていた。大道寺もその渦中にいた。ところが、それらの運動に、民族・植民地問題から捉える視点が加味されてきた。それは必然的に、天皇の名によるアジア侵略戦争とアジアから収奪する大企業への批判となっていった。大道寺は、この路線に賛同し、「東アジア反日武装戦線“狼”」と名乗り、武装闘争を展開しようとした。天皇列車爆破未遂を経て、三菱重工本社を爆破した。三菱を日本帝国主義の侵略企業・植民者に対する攻撃という位置づけであった。予告電話をかけて、社員は避難するように呼び掛けたが、爆発の威力は予想を超えて大きく、ビルからガラスの破片が通行人の頭上に降りかかり、8名が死亡、165名に重軽傷を負わせる大惨事になった。“狼”は狼狽したが、自己批判は禁物と、「“狼”の爆弾に依り、爆死し、あるいは負傷した人間は、『同じ労働者』でも『無関係の一般市民』でもない。彼らは、日帝中枢に寄生し、植民地主義に参画し、植民地人民の血で肥え太る植民者である」と声明した。とても受け入れられる声明ではない。26歳だった大道寺は、容疑者として捕えられ、裁判の結果、1987年に死刑が確定した。

昨年の5月24日、東京・小菅の東京拘置所の病舎で、多発性骨髄腫で、痛みと苦闘しながら68年の生涯を終えた。68年の内、42年間を獄中で過ごした訳である。獄中からの通信、俳句が世に公表され、彼の精神的動向が知らされ、関心を集めてきた。今年の3月『最終獄中通信』が出された。まさに、最後の通信である。

まず大道寺は、自分が犯した犯罪を深く悔い、反省と謝罪をしている。「三菱重工爆破の際にお亡くなりになった方々に心から哀悼の意を捧げるとともに謝罪いたします。突然生命を断ち切られた方々の無念さ、悲しみ、怒りを思い、また、遺家族のこれまでの27年間の重さを思い、言葉を失います。ただ自己批判を深めるばかりです。」このような通信が繰り返されている。「死者たちに如何にして詫ぶ赤とんぼ」「いなびかりせんなき悔いのまた溢る」「ゆく秋の死者に請はれぬ許しかな」。

死刑の執行を待つ独房の生活を想像することはできない。面会が適うのは家族と弁護士だけで、彼らを通して、友人とのわずかな交流はできるが、孤独の中に置かれている。友人の肉筆、獄から見える木々、入って来る小さな虫に感激して、見入っている。死を見据えながらの生活であるが、実に冷静、沈着で、その精神力に敬服する。新聞や本は死刑に関する記事は黒塗りされているそうだが、自由に読んでいる。社会に対する批判は、弱く貧しい者の側に立つ鋭い視点で捉えている。「難民の命軽しや秋の浜」「原発の依存止まざる竹の秋」。読書は非常に多読で、深く読み込んでいる。集中して読むのであろう。

同じ獄舎の何人かに死刑が執行された。「また受くる処刑の報や冴ゆる夜」。大道寺は、死刑廃止を強く訴えている。死刑囚の反省と償いは一切の虚飾を捨てて事実を抉り出すことである。「己が身を虫干しに出す死囚かな」。死刑を待つ身、白日に晒していると詠っている。犯罪は死刑ではなく、事実を抉り出すことによって、抑えられるのである。人間は間違いを避けられず、裁判で冤罪も起こす。死刑の執行は民主主義と相反する、国家による殺人である。オウム真理教関係の死刑囚13人があつという間に処刑された。国家意思による狂暴な暴力としか見えない。死刑存続派は46%、否定派は42%になったと聞く。国家による殺人を世界の国の7割以上が廃止している。野蛮国から脱皮する時ではないか。